

## 高村逸枝『娘巡礼記』に登場する遍路墓の案内碑 —約 100 年の時空を超えて—

高野聖などの回国僧は、広範囲に点在する寺院を点と点で結び、その行程を歩いた。近世前期、回国 の道順を系統づけてヘンロ信仰の巡礼の道として位置づけたのは、大坂西浜町寺島に住む高野聖・真念(不詳～1692)である。四国霊場八十八ヶ所の札所が開かれたのは、近世になってからである①。



(写真1) 令和2年2月に落慶した真念庵新堂舎

各札所間を結ぶ道には、旅人の道中手形に指示された主要往還もあれば、地域住民が普段から使用した生活の道である間道もあった。一口にヘンロ道と言うが、これがヘンロ道という決まった道はなく、ヘンロなどの巡礼者がその時代に状況に応じて利用してきたのがヘンロ道である。近世からの巡礼史の中で寺院の位置を記した「しるべ石」や、そこまでの距離を示した「丁石」、巡礼者の供養塔である「ヘンロ墓」などが自然と集積され、それを目安にしながら現在利用されているヘンロ道が徐々に形成されていった。

土佐国は16札所、総延長距離は約384キロメートルに及び、「修行の道場」と位置づけられている。その中でも、窪川(四万十町)の37番札所岩本寺から38番札所金剛福寺までの距離約100キロメートルは、札所間最長の距離である。そこで真念は、38番札所金剛福寺と39番札所延光寺の中間地点にあたる市野瀬に庵を結び、堂舎や宿所を設けた。この宿舎は、昭和30年代まで堂舎兼宿舎として建てられており(割と大きな建物であった)、二人の高齢女性によって運営されていた。これによりヘンロは、身軽に足摺岬金剛福寺まで行き帰りができるようになった。

真念庵から市野々方面へ下る間道の道脇に福岡県福岡市大工町出身のヘンロ墓が所在している（写真2参照）。この墓碑は、高群逸枝（1894～1964）が、大正7年（1918）6月4日から11月20日まで四国ヘンロの旅をしたときに登場する。彼女は、平塚らいてう（1886～1971）らと無産婦人芸術連盟を結成し、婦人運動に取り組んだ。また、女性史研究に没頭し、女性史学という新しい学問研究分野を切り拓いた。逆打ちで四国ヘンロの巡礼を行うため、6月4日に熊本を出発し、大分・佐賀関経由で八幡浜へ渡った。7月23日から8月2日まで土佐清水市域に滞在して金剛福寺―真念庵間のヘンロに時間を要している。このときに先程記述した福岡県出身者のヘンロ墓を見た。それを彼女は著作『娘巡礼記』（朝日選書、1979年）に綴っている。約100年前に所在していたヘンロ墓が現在も同じ位置にあることが時空を超えて不思議な感覚を覚える②。



（写真2）『娘巡礼記』に登場するヘンロ墓の案内碑

註

①中山進「五 交通・運輸・通信」（『土佐清水市史 上巻』土佐清水市、1980年、609～626頁）

②高群逸枝『娘巡礼記』朝日選書、一九七九年。

### 【編集後記】

昨年は国史跡指定をめざす、国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を活用しての金剛福寺道の真念庵周辺道約0.6キロメートル区間の調査1年目であり、周辺の埋蔵文化財・石造物悉皆の調査を濱田眞尚・唐岩淳子・東近伸・弘田之彦・武藤清各氏のご尽力のもと、精力的に進めていった。

本年度は、この区間の測量調査を株式会社第一コンサルタンツに委託して実施する。いよいよ調査2年目となり、これで一連の調査活動が完結する。調査が完了次第、図面と報告書を添えて、国史跡指定の申請を文化庁に提出したい。

本市は、国指定重要文化財吉福家住宅の保存・活用に関わる課題をはじめ、文化財に関わる重要な課題が残っている。これらの課題の解決にはどうしても時間がかかる。しかし、これに押しつぶされるのではなく、今できることを一步一步、着実に進めながら、10年先を見据えて地道に取り組んでいく必要がある。

土佐清水市は、地域素材（地域資源）がたくさんあることは、ジオパーク活動でも既に証明済み。これらの素材を活かして地域の良さを示していくことが肝要。真念庵周辺道国史跡指定がその起爆剤になってくれれば嬉しい。（田村）